



水大学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <https://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学 生 課

校長あいさつ

校長 下 川 伸 也



2022年4月より水産大学校校長職の重責を担い3年目を迎えております。微力ながら引き続き水産大学校の教育・研究活動を充実するべく努めて参所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。さて、大学校の実績につきまして、令和5年度の卒業・修了生の就職率は99.4%、

そのうち水産業及び関連産業への就職率は83.4%となりました。このことは、就職先となる企業の皆様からの多大なご支援とともに、合同企業説明会の開催（Web形式で141社参加）、学科長・担任教員等による学生就職支援のための企業訪問などの地道な広報活動が功を奏したのではと考えています。また、入学試験につきましては、本科で約3.6倍の高い倍率を維持でき、新学期を迎え本科185名、専攻科50名、水産学研究科11名と合計で246名の新生を受け入れることができました。教職員による高校訪問を再開しオープンキャンパス等のイベントを対面で実施するなど、徐々に成果が現れたのではないかと期待しております。

新型コロナウイルス感染対策に翻弄させられて5年、大学校構内では、原則として対面形式での授業に戻し、講義、実験・実習や卒論指導、乗船実習も含めた教育活動全般で実施することとしてきています。その他にも、クラブ活動、学生自治会の活動、大学祭、地域のボランティア活動、地域住民の方々や近隣の漁業者や水産業界の皆様に向けた公開講座などを徐々に再開していき、“活気ある水大”に戻れるように努力を進めています。今年度、水産大学校で行われた主な競技大会や学生諸君の参加で大会を盛り上げた競技を幾つか挙げますと、2024年6月2日（日）に第68回全日本カッター競技大会を大学校前浜の吉見沖海上で7年ぶりに主管し、

一般男子9チーム、女子6チームが参加し熱戦が展開されました。また、同年7月21日（日）には第10回下関カッターレースには、本校端艇部・女子端艇部の全部員が大会運営に携わり、地域での海事思想の普及啓発や下関市の賑わい創出に協力しています。学術関連では、2025年5月24日（土）、25日（日）には全国規模の学会開催として、日本水産工学会を水産大学校キャンパス内で開催する予定となっています。

さらに、機構初のベンチャー企業設立として、本校松本浩文准教授が「Digital Fisheries Lab. 合同会社」を設立し、水産研究・教育機構の成果活用事業者として認定されました。これにより、漁業生産の現場においてアプリシステムの運用とデータ管理を中心にICTを積極的に活用した事業展開を目指すとされています。また、水産庁が手がける「デジタル水産業戦略拠点の創出」において下関地域が戦略拠点の一つとして選出されました。

また、本校は国立研究開発法人水産研究・教育機構の人材育成業務を担う部門として、機構業務の一翼を担っています。今年度は、第5期中長期計画の期間5ヶ年のうちの4年目となり、本計画の中では水産に関する学理・技術の教授とこれらに関連する研究を実施することを目標に掲げています。具体的には、1) 水産資源の適切な管理と持続的利用に寄与する人材育成、2) 水産生産技術の開発や社会実装に寄与する人材育成、3) 水産に関する広範な知識を有する水産技術者・海技士の育成の3つを柱に据えて進め、水産業を担う中核的な人材育成を推進することとして取り組んでいます。以上、昨今のトピックスを述べてきましたが、水産大学校は、これまで通り、本科・専攻科及び水産学研究科の教育・研究活動が基盤であることに変わりはありません。引き続き、“水大生諸君”がこの地で学び、水産学の基礎を身につけ、巣立っていく。文字通りの母校として誇れるような学園づくりに邁進する所存です。保護者の皆様はじめ関係各位には、今後ともご支援とご理解を賜りますようお願い申し上げます。校長の挨拶といたします。

最近の話題

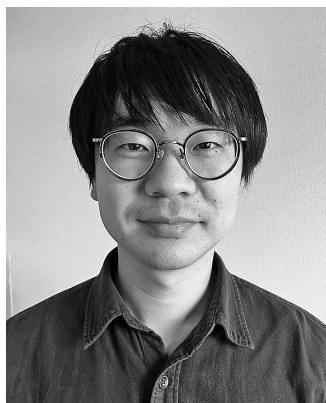
着任のご挨拶

水産流通経営学科 助教 小林 弘 京

今年度5月より着任いたしました小林弘京（こば

やしひろたか）と申します。専門は数学で、特に解析の整数論と呼ばれる分野を研究しております。本学では解析学（微分積分）や線形代数（行列など）の授業を担当しています。

私は高校まで島根県で生まれ育ち、広島大学へ進



学し、その後名古屋大学の大学院へ進学してから本学へ着任するまで愛知県で暮らしていました。数年ぶりに中国地方へ戻り、愛知県ではあまり目にすることの無かった、懐かしい食材を楽しんでいる毎日です。

さて、数学を学ぶ意義とはいったい何でしょう。

私は大きく2つ、理由があると考えています。1つは、言ってしまうと身も蓋もないのですが、数学がとにかく役に立つからです。具体例は挙げられずとも、水産業に限らず、あらゆる産業において数学が利用されていることは多くの方がご存知ではないでしょうか。数学は、現代の我々の生活を支えている基盤の一つと言っても過言ではないでしょう。しかし、数学がそのように役に立つものであることは知っていても、自身がそれを学ぶ必要性について疑問を持つ人も少なくないと思います。

そこで、2つ目の理由を端的に述べると、思考力を養うためです。数学では、与えられた条件（情報）を検討し、それを基に問題に対する解答を考えます。私は、数学的な内容以上に、この過程が重要だと考えます。現代ではインターネットの普及により、個人が単純な「知識」を持つことにかつてほどの大きな価値は無くなりました。さらにこの数年における生成AIの目覚ましい発展により、「思考」も肩代わりできるようになりつつあります。しかし、生成AIの発展によって、むしろ思考力の重要性が増したと私は感じます。生成AIの回答に間違いが無いか、見聞きした情報は、生成AIによって作り出された偽情報を含んでいないか、等々、自身で考えるべきことは尽きません。それらの情報を検討し、最終的に意思決定し、責任を持つのは私たち自身です。

以上のようなことを意識しつつ、今後の水産業を担う人材の育成に貢献できるような教育を行っていきたくと考えています。至らぬ点も多々あるかと思いますが、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

マサチューセッツ大学ダートマス校の Pinggou He 教授が来校

海洋生産管理学科 教授 梶川和武

10月11日にマサチューセッツ大学ダートマス校水産海洋学部の Pinggou He 教授が来校されましたので、その時の様子を紹介いたします。

Pinggou He 教授は、マサチューセッツ州立大学ダートマス校水産海洋学部の学部長で、ご専門は漁具学、魚類行動学、海洋環境保全工学です。また、ICES-FAO の Working Group の1つである「Fish technology and fish behavior」の Chair を務め、

世界の研究者の議論をまとめてきた経験をお持ちで、かつ、世界の漁業研究をリードしてきた人物です。この度は、所属している大学のサバティカルを利用して来日することとなり、その一環で、私の研究室にも来て頂くことになりました。

最初に、練習船 耕洋丸を見学しました。船内の案内は、古賀船長にご対応頂きました。まず、サロンにて練習船の概要を説明して頂き、次に Dry & Wet 研究室やデッキに行き、調査機材、漁労機器について説明して頂き、最後にブリッジに上がって、航海計器などを説明して頂きました。Pinggou He 教授にとって、大学の練習船の見学は今回が初めてとのことで、ICES-FAO でのディスカッション時のピリピリした雰囲気とは異なり、終始、朗らかな表情で、熱心に説明を聞き入っていました。時折、お互いに冗談を言い合いながら、1時間以上の耕洋丸の滞在があつという間に過ぎ、私も一緒に楽しい時間を共有できました。

次に、私の研究室に移動して大型回流水槽で、現在、取り組んでいる改良漁具の模型実験を見学してもらいました。実験を見学しながら、実験方法や得られた結果に関して意見交換を行いました。意見交換を通じて今後に関わる指摘や気付きもあり、私にとってもいい機会となりました。その後、場所を移して海洋生産管理学科及び研究科の学生・教員に対して「Fish behavior and conservation engineering in capture fisheries」の演題で講演して頂きました。本講演では、ご自身の大学や研究室の紹介から始まり、取り組んでいる研究の紹介の一環として漁業が環境に与える影響やその保全方法、特に資源保全のために重要である混獲を防ぐための具体的な方法についての解説や将来にわたって漁業を続けていくために求められる要素について分かりやすく



大型回流水槽の前で、学生と Pinggou He 教授（後列中央）、筆者



耕洋丸で Pinggou He 教授（右）、筆者（中央）、古賀船長（左）

話してもらいました。学生達は、講演終了後、携帯を片手に英語を調べながらではありましたが、積極的に英語で質問するなど世界の一流の研究者と対等に渡り合って交流しており、とても頼もしく感じました。

私は、2019年まで毎年のように国際学会に参加していましたが、以降はコロナ禍となり、現在まで中断しています。今回の Pinggou He 教授との再会は、大きな刺激となり、再び国際舞台へ戻っていきけるように日々の研鑽を積んでいきたいとの思いを新たにすることができました。

海洋機械工学科 2 年生の乗船実習

海洋機械工学科 助教 吉村 英行

令和6年10月25日から10月31日にかけて、海洋機械工学科2年生を対象とした海洋機械実習Ⅰ（乗船実習）にクラス担任として乗船させていただきました。下関港から広島県の宇品港という航海距離としては非常に短いですが、初めて乗船実習に参加する学生達にとっては長い航海に感じたかもしれません。筆者も水産大学校海洋機械工学科61期の卒業生であり、今回乗船する学生達と同様に海洋機械実習Ⅰを経験した立場でもあります。乗船生活は大学の時以来のため、ちゃんとやっていけるのか不安を抱えたままでの乗船となりました。

練習船での生活は規則正しい生活が求められます。朝6:30からラジオ体操を行うため、その時間に合わせて起床することが求められ、朝・昼・晩の食事時間も決まった時間を取る必要があります。また午前と午後には普段の大学生活と同様に、船内で講義や実習が行われ、気が休まる時間が少ない環境下に置かれます。就寝時間は決められていませんが、巡検と呼ばれる1日の最後を締めくくる点検が練習船乗組員によって実施され、1日の日課が終わります。そのような環境下に置かれると、学生達同士でお互いに素の姿を見ることが出来るのも乗船実習の面白いところです。当然他人の嫌な所が見えたりしますが、お互いにそこを我慢しながら支え合って共同生活乗り越えることで、社会人として必要不可欠な協調性が身に付き、精神的な面で成長できるのが乗船実習の良いところです。

寄港した広島では、当校の卒業生が現在副工場長を務めておられる株式会社前川製作所の東広島工場の見学を実施しました。自然冷媒を用いた冷凍機製造会社であり、私も前職で前川製作所の冷凍機には大変お世話になった立場でもあります。工場長から直々に全体の説明が行われ、3班に分かれて工場内を見学させていただきました。座学で学ぶことも大事ですが、実際の機械を見て学ぶことも重要であり、学生達にとっては貴重な経験になったのではないかと思います。

今回の乗船実習は船内生活に慣れることが目的であるため、航海中のワッチがなく、航路も瀬戸内海なので船酔いに悩まされる学生も少なく、実習内容が少し物足りないと感じた学生も少なからずいたか

もしれません。しかしながら、来年の海洋機械実習Ⅱ（乗船実習）では、1ヶ月という長期間の乗船実習が控えており、今度は多くの学生が船酔いに悩まされることでしょうか。また、ワッチという変則的な船内生活が学生達を肉体的にも精神的にも追い詰めるかもしれません。そのような状態に陥った時に学生達同士でお互い励まし合い、助け合いながら差し迫った困難に対して乗り越えられる人材になれるよう、乗船実習を通して成長してほしいと願っております。



第29回釜慶大学校

—— 水産大学校学術交流懇談会

食品科学科教授兼食品科学科長 宮崎 泰幸

2024年9月10日から12日まで、企画調整役の池原教授、演者の和田教授、杉浦教授と福田准教授に加え研究科生6名の総勢11名で釜慶大学校（韓国・釜山）を団長として訪問し、第29回釜慶大学校—水産大学校学術交流懇談会に参加しました。

水産大学校の歴史は1941年に釜山市に創設された釜山高等水産学校に始まり、釜慶大学校もその起源は同じで、両校はまさに兄弟校と言えます。両校開校50周年を記念して、両校の情報交換ならびに教員及び学生の交流を柱とする学術・教育交流を目的として協定が締結されました。これを受けて、1995年に第1回学術交流懇談会が釜慶大学校で開催されました。その後、毎年交互に訪問するスタイルが定着し、第17回までは教員だけの交流でしたが、第18回からは学生を交えた交流になりました。コロナ禍の一時中止を乗り越え、Web会議形式での復活を経て、今回4年ぶりの対面での開催に漕ぎつけました。

一日目は福岡空港から金海空港へ渡韓し、コーディネーターのKim Seonghun 助教授の出迎えで大学のバスで釜慶大学校へ移動後、Kim Young-Mog 水産科学大学学長、Kim Chan-Hee 水産科学大学副学長、Kim Seonghun 助教授、座長のMok Jin Hong 助教授が参加し、教員歓迎会が開催され情報交換を行いました。二日目はJang Young-Soo 総長表敬訪問のあと、ガイドによるキャンパスツアーで24時間開館の図書館、スポーツ棟ほかを見学しました。昼食後シンポジウムが開催され、教員による口頭発表と双方学生による1分間スピーチとポス



ターセッションが行われました。夕方からは両校学生を交えた懇親会があり意見交流を行いました。三日目は国立海洋博物館見学の後、大学のバスで飛行場へ向かい帰路につきました。

食事での歓待だけでなく、急な降雨時の傘の迅速なプレゼント、体調不良者への配慮、忘れ物に対する臨機応変なバス運行の対応、ゲストハウスでの対応など最大限のおもてなしを受けました。本年は食品科学科教員が訪問しましたが、双方学生の研究分野は多岐にわたっていることや、留学体験があり日本語が達者な若手教員が釜慶大学校にはほとんどいなくなってきたことなど、課題があります。私は本シンポジウムでの訪問は25年前、7年前そして今回となりましたが、インフラのみならず、学生・職員の精神的な側面からも大学としての格差が年々広がってきている感を強く受けました。次回は第18回と同様に大勢の学生が練習船で訪れることも考えられ、そうなれば受け入れ体制を整える必要があります。学生同士も学術面だけでなく文化面でも英語を介しての交流が活発に行われ、学生・教員ともに有意義なものとなりました。華美になることなく、両校の交流が細く長く続くことを祈念いたします。

スーパーサイエンスハイスクール 海洋生物観察実習

生物生産学科 南 條 楠 土

文部科学省が指定するスーパーサイエンスハイスクール（SSH）とは、未来を担う科学技術人材を育成することをねらいとして、理数系教育の充実をはかる取組です。本校は福岡県立城南高等学校と連携し、SSH事業として海洋生物観察実習を実施してきました。本校からは生物生産学科の村瀬教員、阿部教員、大戸教員（現在は愛媛大学）、山田教員、南條が指導にあたり、この連携も今年で5年目を迎えます。

この実習では、アマモ場生態系における海洋生物の観察や標本作成などを通して自然科学へ興味・関心を高め、科学的な考え方を養うことを主な目的としており、対象は理数コース1年生の生徒です。この連携がはじまった令和2年度では、新型コロナウイルスの蔓延によりオンラインで実施しました。こちらからアマモや小型魚類などの標本を郵送し、生徒が種の同定やスケッチをする際にweb会議シス

テムで指導する形を取りました。当初、モニター越しでは細かい点に目を配ることができず、生徒にちょっとしたアドバイスを伝えることも難しいと感じました。しかし、城南高校の教員が各生徒の手元までカメラを向けるなどの協力をしてくださり、最終的にはオンラインでも教育効果のある実習にすることができました。

翌年も同様にオンライン実習でしたが、令和4年度からの3年間、ようやく本校で3日間の実習を行いました。1日目には本校前海（吉見湾）で小型地曳網による生物採集を行いました。全員にライフジャケットを装備させ、安全対策のもとに現場作業を行いました。網による曳網が初めての体験で、予想よりも水の抵抗が強いことや、しっかりと広げて網を曳く難しさを感じながらの採集だったようです。ただ、自分たちで生物標本を採集できた際には喜びの声もあがりました。2日目の実験作業では、アマモや採集した魚類などを詳細に観察し、彼らが初めてみるような魚類でも専門的な図鑑を使って種を同定しました。3日前には実習の成果や感想、気づきなどを班ごとに発表してもらいました。単純に「思ったよりも海が冷たかった」や「吉見湾の海流と淡水流入の条件によりアマモの生育が制限されている」など様々な意見が出ました。班同士の協議でもお互いの考えをぶつけ合っており、身近な海について真剣に考えてくれることを嬉しく感じました。この5年間の取り組みを通して、高校生という若い時期から海の生き物に少しでも多くの関心を持ってもらえれば幸いであると思っています。



着任のご挨拶

天鷹丸二等機関士 中 野 竜太郎



本校練習船「天鷹丸」の二等機関士を務める中野竜太郎と申します。愛知県名古屋市の出身です。愛知県立天白高校を卒業後、2015年に「水産大学校海洋機械工学科」に入学いたしました。祖父が下関市豊北町滝部の出身で、水産大学校のことにつ

いて知っており、入学したことを大変喜んでいたことを今も覚えています。

2020年に「水産大学校専攻科船用機関課程」を修了し「水産研究・教育機構」へと就職し、2年間機関士の予備員として勤務しました。その際は、機関士として経験を積むための乗船や、欠員の出た船への補充要員としての乗船を行い、多くの本機構船舶に乗船し、また多くの職員の方々と交流することができました。2022年からは「水産研究・教育機構 塩釜庁舎 調査船 若鷹丸」の二等機関士に配属さ

れ主に発電機、造水装置、空調・冷凍機や空気圧縮機等の補機類を分担機器として担当し、トロール調査や釣り調査ではワッチの合間を縫って調査の補助として操業に参加いたしました。

本年度より「天鷹丸」の二等機関士として配属されました。本船では主に発電機、造水装置、空気圧縮機や温水ボイラー等を担当するほか、練習船の機関士として水産系海技士を目指す学生の指導も担っております。

天鷹丸へ着任し、まもなく1年となりますが、私が練習船の機関士として心がけていることは自分自身が就職してから「学生のうちから知っておけばよかったな」ということを学生に伝えることです。自身が就職して5年目、また機関士として担当機器を持つようになってから3年目のまだまだ経験の浅い身でありますので、就職したばかりの頃や機関士として働き始めた頃に困ったことや学習不足だなと感じたことは記憶に新しいです。そのような経験を学生に共有し、就職してからの不安を解消してもらえよう指導していきたいと心がけています。また、乗船中の生活や不安について相談してもらえよう学生とコミュニケーションをとり、天鷹丸に乗船してきた学生が少しでも有意義な実習だったと思ってもらえるよう職務に当たって参ります。

まだまだ未熟な身ではございますが、学生と一緒に機関士として成長していけるよう誠心誠意努力してまいりますので、皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

就 職 活 動

「信念を貫く強さを持つ大切さ」

水産流通経営学科4年 北 村 悠

私は山口県漁業協同組合に内定をいただきました。

私が漁協に就職したいと考えた理由は、水産業に従事する漁業者をサポートする役割につきたいと常々考えていたからです。その就活の軸と漁協が合致しており、かつ初めて一人暮らしをして第二の故郷ともいえるこの下関の水産業を盛り上げ、後世に残す仕事に就きたいと考え、山口県漁協を志しました。

就職活動では、多くの方は希望の就職先を何社も受け、内定をもらっていくと思いますが、私の場合は山口県漁協のみしか採用試験を受けていません。そして、漁協の採用試験は時期が遅く、4年の9月まで何もできないもどかしい時間がありました。周りの友達が次々と就職先を決める中、自分だけ取り残されていることへの焦燥感や恐怖を今でも覚えています。しかし、今では自分の信念を貫いてよかったと思っています。複数社受けてもっと早くに別の企業の内定をもらっていたら、私はその企業に就職していたかもしれません。そうすると、2年生のころからの目標を貫けなかったことを後悔したと思います。自分の未来に後悔が残らない就職活動を皆さ

んにも行って欲しいです。一人でふさぎ込んでしまいそうな時は学校の信頼できる教授や友人に相談してみると、良い提案を受けられるかもしれません。

就職活動で重要なこと

海洋生産管理学科4年 大 崎 稔 真

私が就職活動で一番大事だと考えることは、面接でいかに自分をアピールできるかということです。

私は、在学中に水産特論の授業を受けて養殖業に大きな関心を抱き、将来養殖業に携わりたいと考えました。しかし、所属している学科では養殖業に関する授業が少なかったため知識が乏しく、就活面接で養殖関連のことを聞かれても上手く答えられるか不安でした。実際に、一次面接のグループ面接では、学校で養殖を専門に学んでいる就活生が大部分でした。

そこで私は、養殖に関する内容では他の就活生に勝てないと思い、自身の人間性をアピールすることとしました。私は水泳部の部長だったのでそこで得た経験に加えて、バイト先の人達からの自身に対する評価などを話し、面接官に対して自身の話をさらに聞いてみたいと思ってもらうように十分にアピールしました。そのことによって、二次面接も通過し、無事に内定をいただくことができました。

面接では、緊張し何を話したらいいかわからないという人も多いと思いますが、まずは自己分析をすることが最も大事だと考えます。友達やバイト先の人達からの評価なども含めて自分を知り、その情報を基に正しくアピールできるように頑張ってください。

就職活動について

海洋機械工学科4年 中 島 快 太

私が就職活動を行って感じたことは、「案外どうにかなる」です。ただし、エントリーシートやSPIの対策、企業研究などやった方がよいことはあります。エントリーシートでは乗船実習のことを書けば他大学にはない大きな特徴なので、面白そう、話を聞いてみたいと思う企業は多いと思います。SPIは勉強すれば取れます。売り手市場の状況が関係しているのかもしれませんが書類で落とされることは少ないはずです。それらのことを頑張れば後は面接です。結局、就活では面接が1番大事だと思います。アプリやサイトなどを使い企業研究するのは大事です。質問されることが載っていることもあるので答えられるようにしておくとも良いかもしれません。笑顔ではきはきと話すのも大事です。しっかりとコミュニケーションがとれるかを1番みられています。最後にこれから就活される方へ、就活中はやることも多くつらいかもしれません。会社は普通に落としてきます。気持ちを落とさずその会社は見る目がなかったんだと思い頑張ってください。早めに内々定を頂くと残りの学生生活が楽しいのでお勧めですが、人生を左右する大事なことから妥協はせず頑張ってください。

納得のいくファーストキャリアを歩むには

食品科学科4年 土 屋 宗 遠

就職活動では「主体的な行動」が重要です。行動には目標設定が必要であり、個人の資質や生活規範に基づいて自分自身で決めることになります。これを踏まえて就活で重要なことを簡潔に3つ挙げます。

1つ目は情報。他大学の学生は進路指導部や先輩からの手厚い支援を受け、大学2年冬には就職活動が始まります。昨今、多くの情報がネットを通じて得られますが、表面上の情報を鵜呑みにするのではなく、他校のライバルを意識した対策が必要になります。

2つ目は営業商材である自身への理解。自分の価値を端的に相手に伝えることが求められます。根拠を伴う自己表現こそがESの作成や面接時での武器になります。

3つ目は、インターン採用のチャンス。就活は過酷で試行錯誤の連続です。インターン参加は他の学生の情報を知るとともに、企業の採用担当者との接点にもなります。この参加の可否は就活成績に多大な影響を持つため主体的に進めると良いでしょう。

最後に、就活は予想を超える時間と労力が必要で

あるため、優先順位をはっきりさせる必要があります。就活が公欠にならない当校では出席日数はシビアな問題です。就活に向けて授業の出席日数は確実に稼いでおくことは勿論の事、当事者意識をもって自己管理に努めてください。皆様が納得のいけるファーストキャリアを歩めることを切に願っております。

就職活動を通して

生物生産学科4年 藤 井 力

私は、株式会社北開水工コンサルタント様に内定をいただきました。就職活動は3年生の2月頃から本格的に始めました。将来どのような仕事をしたいのか心に決めていましたが、就職活動を始める時期が遅かったと後悔しています。実際に、中途半端な準備しかできないままに第一志望の企業の選考を受ける形になってしまいました。この経験から、次に受ける企業からは後悔のないように万全に対策して臨むように心に決めました。その際、就職対策として大変お世話になったのは本校の就職支援室です。主にエントリーシートの添削を中心に様々なアドバイスをいただきました。そこで感じたことは、自分では完成したと思っていても他人から見れば全くそうでないということです。キャリアアドバイザーの意見に納得がいかず、言い合いになってしまうこともありましたが、内定を貰えたのは自分の考えを隠さず伝え、キャリアアドバイザーがそれをしっかりと理解してアドバイスをくれたからだと考えています。皆さんに伝えたいことは、就職活動は必ず思い通りにいかないということです。そして、その時には就職支援室などの力を借り、自分の思いを隠さずに伝えれば道が開けるはずです。

就職活動において大切にしていたこと

専攻科船舶運航課程 田 代 悠 誓

私が就職活動で意識していたことは、就活の軸を決めることです。私は調査船の航海士として未知の探求や発見に携わりたいと考えていました。これを就活の軸として就職活動をしていました。就活の軸を決めることで企業選びの際に迷いが少なくなり、面接においては自分の軸に基づいた論理的な回答で一貫性のあるアピールをすることができます。

また、興味がある会社について深く理解するために、説明会や会社訪問に積極的に参加することも大切だと思います。参加することで会社の事業内容や理念を知るだけでなく、社員の雰囲気や職場環境を感じ取ることができます。また、船員志望に限った話ではありますが可能であれば訪船をするべきだと思います。私自身訪船をしたことで、実際の職場を目にして具体的なイメージを持つことができ、志望動機をより説得力のあるものにすることができました。

就職活動中は他人と比べたり、不安になったりすることがあるかもしれません。その時は焦らず、自分らしく取り組んでください。なにより大切なことは前向きな気持ちを持ち続けることだと思います。

図 書 館

図書館の活用

学生部図書課 課長 若 林 敏 江

図書館は、本を借りる以外にもさまざまな活用法があります。今回はその1つである山口県大学 ML (ミュージアム・ライブラリー) 連携特別展について紹介します。本校図書館では、毎年11～12月に山口県大学 ML 連携特別展を開催しています。山口県大学 ML 連携事業は、全国的にも稀な広域大学連携事業で、本校も参加しています。今年は県内11大学13館が参加し、共通テーマ「ふかめる」で各館このテーマに沿った展示を行いました。本校ではサブテーマを「水産学をふかめたら・・・」として、5学科それぞれの教員の研究紹介を行いました。「ふかめる」内容は様々で、食害魚、造船の形、アブラツノザメ、環境負荷、魚の“におい”、身近なノリ、イカのおつまみなど、海から食卓まで水産のあらゆる分野について学ぶことができる本校らしい内容となりました。また、こんなこともやっているの？という研究もあり、普段は中々知ることのできない他学科の教員の研究を知るよい機会になったと

思います。

図書館のカウンターの奥から見ていると、毎日のように来館する学生がいる一方、入学以来ほとんど図書館に足を踏み入れることがない学生もいることが想像できます。本校図書館が提供する資料だけでも、水産に関する図書や、就活に役立つ図書、研究に必要な文献、小説など様々です。あまり図書館に来ることのない方は、ぜひ一度、自分なりの図書館の活用法を探しに来てください。



学生部だより

私を支えてくれるもの

水産庁 増殖推進部 研究指導課
梶 原 楓

私は令和4年3月に、水産学研究科水産資源管理利用学専攻を修了しました。

水産庁入庁後は、加工流通課で水産物の消費拡大に係る広報業務を主に担当しておりましたが、今年の11月に研究指導課に異動し、現在は漁船リースなどの予算執行業務を中心に担当しています。異動により一から仕事内容を覚えることも多いですが、その分学びも多く、水産に関する多角的な視点を持てるようになる職場だと思います。

約3年間、本省に勤務して感じたことは、国家公務員という職業の特性上、「社交性と常識」が肝要であり、より求められる環境であるということです。名刺交換をはじめとした社会人のマナーは、入庁直後の研修で教わりますが、発案する知性、口に出さない品性、報連相、メモを取るといった行動は全員が教えてくれるわけではないため、日々の心掛けが重要となります。私自身もまだまだ反省点が多く、今後も研鑽が必要です。これらの点については在学時にボランティア活動やアルバイト、部活動、研究活動などで意識してみると良いかもしれません。以上、硬い文章となってしまいましたが、水産庁自体は全く堅苦しい職場ではありません。優しく釣りや魚好きの人が多く、同じ話題で様々な世代

の人と熱く語り合えるのは水産庁の大きな魅力だと思います。

最後に、私が在校生の皆様が一番伝えたいことは、「水産大学校ならではの環境をフル活用して楽しむこと！」です。本校はきれいな海、豊かな生態系、唐戸の魚市場や水族館と周辺環境に恵まれているとともに、専門家顔負けの知識を持った学生が多く、これ以上ない水産の学び場です。ここで得たご縁と経験は、就職面接や入庁後の様々な業務、先輩や同期のコミュニティなど、公私ともに今も私を支えてくれています。

水産大学校で過ごす時間には、人生のハイライト



魚食普及イベントにおけるステージ登壇（中央女性）

となり得る魅力があると思っています。いつだって遅くはないので、ぜひ、在学中に自分にとってかけがえのない何かを探してください。

学生時代に大事にして欲しいこと

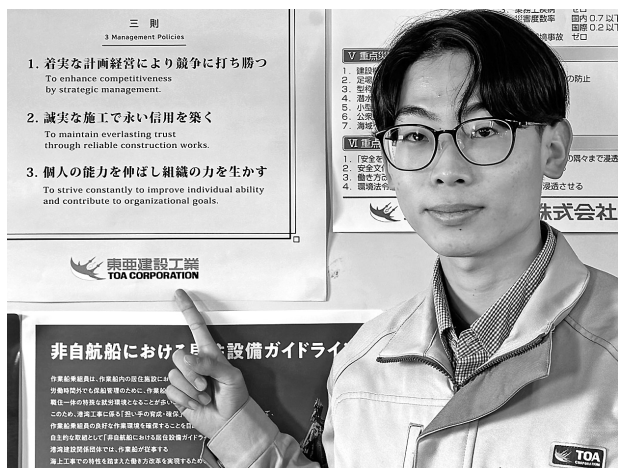
東亜建設工業株式会社 本社 土木本部機電部機械 Gr
濱 崎 洸太郎

私、東亜建設工業株式会社入社1年目の濱崎洸太郎と申します。現在は機電部機械グループに所属しております。主な業務は、作業船の設備管理、システム導入、現場支援、展示会対応などになります。ゼネコンの中で土木、建築職に比べて人数の少ない業種ですが、機械と電気に関する様々な業務に携われる魅力的な職種だと感じております。入社して半年以上経ちましたが、毎日が新しいことばかりで日々が早く過ぎていくように感じます。特に印象に残っている業務は、洋上風力発電建造の際に使用される SEP 船の業務です。先輩に同行して様々なことを教えていただき、作業船の魅力を感じることができました。

海洋機械工学科在学中の2年生までは、機関士になることを目標に取り組んでいました。ですが、講義や実習を受ける中で何回も気持ちと目標が変わり、最終的には陸上職で活躍したいという思いになりました。陸上職、海上職ともに魅力的な仕事はたくさん溢れています。ぜひ後悔のないように様々な視点から職業について調べてみてください。

今回テーマにしました「学生時代に大切にしたいこと」についてですが、私の経験から1つ目は主体性、積極性を養って色々なことに挑戦して欲しいと思います。この2つの意識を身につけておくことで、就活時の大きな武器になると思います。2つ目は最終決定を自分自身で行うことです。性格や価値観は人それぞれ違いますので、色々な人のアドバイスを参考にして最後は自分で決めて欲しいと思います。仮にその後に後悔があっても、自身で決めたことでするので言い訳することなく頑張ることができます。

就職活動、大変なことのほうが多く感じるかもしれませんが、ぜひ一度しかない「新卒」という権利を大事にしながら内定をとって欲しいと思います。皆さんのこれからの活躍を応援しております。



三等機関士としての使命と成長

国立大学法人東京海洋大学練習船海鷹丸 三等機関士
山 田 翔 大

現在、私は東京海洋大学の練習船「海鷹丸」において三等機関士として勤務しております。海鷹丸では、専攻科の学生とともに南極海を対象とした調査に赴く遠洋航海が実施されており、それに伴い多くの観測機器や関連設備を搭載しています。この業務においては、初めて取り扱う機器や初めて経験する航海が多く、日々新たな知識や技術を習得する機会に恵まれています。

航海中には、多岐にわたる研究および観測活動が行われます。学生時代に見学していた観測も、現在では機関士として機器の運転や操作に携わる立場となり、その技術的な難しさを実感しています。主機の運転のみならず、推進電動機の管理やシステム操船を含む船橋からの指令を遂行する中で、一つの誤操作が高価な観測機材の紛失や破損といった重大な結果を招きかねません。このような環境の中で、計画通りの観測を実施し、時には急な指令変更にも柔軟に対応する日々は非常に充実感を伴うものです。

私は、かねてより極地に対して深い関心を抱いておりました。南極地域は、地球温暖化に伴う海面上昇や異常気象の原因とされる一方で、水中に閉じ込められた大気成分が地球環境の過去に関する重要な情報を提供するなど、地球の過去と未来を解明する鍵を握る地域として注目されています。一方で、北極海においては温暖化に伴う海水変化が進行しており、北極海航路の開発が活発化しています。この航路は、ヨーロッパ圏への輸送において従来の航路と比較して日数を最大2割削減できる可能性があり、経済的にも極めて重要な意味を持ちます。このような背景の中で、極地調査に携わる日本国内の組織は限られており、その中でも南極海の調査に参加できることを非常に幸運であると感じています。

人生においては、さまざまな選択を迫られる場面が多々訪れます。その際には、自らの内なる興味や関心の声に耳を傾け、選んだ道に後悔のない人生を歩まれることを心より願っております。

